

東山会会報

平成 15 年 1 月 1 日発行
名古屋市千種区不老町 〒464-8603
名古屋大学 工学部 機械工学教室内
名古屋大学東山会
連絡先：TEL 052-789-4486(酒井教授室内)
E-mail: mechalum@everest.mech.nagoya-u.ac.jp

平成 14 年東山会新年同窓会



新年同窓会に参加された名誉教授の先生方



ホームページ開設のお知らせ

東山会の公式ホームページを開設しました。東山会では新しい情報インフラとして同窓会ホームページを充実し、同窓会員の便宜に応じていきたいと思っております。今後は運営するにあたり、皆様のご意見・ご要望等を反映して充実したものにしたいと考えておりますのでよろしくお願い致します。

ホームページアドレス：<http://www.higashiyamakai.com>

第4回「東山へ帰る日」

第4回「東山へ帰る日」を下記のとおり開催致します。お誘い合わせのうえ多数ご参加くださいますよう、ご案内申し上げます（詳細はp.18をご覧ください）

日時：平成 15 年 6 月 6 日（金）（名大祭期間中の金曜日）

（注）名大祭の日程が未定のため変更の可能性もあります。

場所：名古屋大学東山キャンパス

会費：5,000 円

対象：第 11 回（昭和 27 年 3 月）、第 12 回（昭和 28 年 3 月）の卒業生には 4 月初旬に案内状をお送り致します。（他年度の卒業生で、参加希望の方はご連絡下さい。）

工学部同窓会名簿発行のご案内

工学部全学科の卒業生および工学研究科全専攻の修了生の最新データ約 35,000 件が掲載された工学部同窓会名簿が平成 14 年末に 4 年ぶりに改訂発行されます。今回から従来の冊子版に加えて CD-ROM 版の名簿も制作されます。CD 版は PDF 閲覧形式で Windows 98SE 以上（XP 含む）および Mac OS 9.0 以上（OS X は含まず）で利用可能です。また、CD 版のみの特典として検索機能、各学科同窓会の紹介記事、広告掲載企業のホームページへのリンクなどがあります。なお、終身会費制を採用する東山会では名簿購入代金の一部を基本的な活動の運営費に充てています。何卒、最新の名簿を多数の方にご購入いただき東山会の活動をご支援下さいますようお願い申し上げます。購入を希望される方は同封の振込用紙にて、下記の要領にてお申込み下さい。名簿が発行されましたら直ちに郵送させていただきます。

記

- | | | | |
|--------|-----------|---------|--------------------------|
| 1. 申込み | 同封の振込用紙にて | 2. 代金 | CD 版 3,000 円、冊子版 4,500 円 |
| 3. 支払い | 申込み時に振込み | 4. 発行予定 | 平成 15 年 1 月 |

会長挨拶

東山会の改革 財政基盤確立のためにー

会長

鈴木 隆 充

(第17回、昭和33年卒)



政治改革が叫ばれていますが、政治でも経済でも、行き詰まりを打開するには、問題の箇所だけを改めて、ほかはそのままでおくという訳にはゆきません。あらゆる面からの改革が必要です。東山会が財政悪化の状況にあることはかねてからご報告し、理事会では皆様からのご意見を取り入れながら解決策を議論しています。

財政再建には「入りを量り、出ずるを制する」が基本ですが、まず、手っ取り早く成果を挙げるには「出ずるを制す」ことです。

そこでまず、今回、会報の発行に当たり、ホームページでも見ていただくことができるように改めてみました。従来のような印刷物によることはいずれやめることを頭に置いた試みです。インターネットを使っていない会員にはご不便をかけると思いますが、家庭でのインターネット普及が進むにつれて問題ではなくなってゆくものと思います。

また名簿はいずれかの段階からホームページにリンクして閲覧できるようにすることを検討しています。印刷した名簿の発行は正確さ、配布の仕方、そして費用などでいろいろ問題を含んでいます。ホームページにリンクさせることによって記載事項の改定が容易にでき、低コストでかつ正確で価値の高いものになることを期待しています。

会員に対する通信手段としてできるだけEメールを活用したいと思います。次回名簿改定のさいにはできるだけ多くの方にメールアドレスの登録をお願いしたいと思っています。

もちろんEメールが届かない方には郵便を使いますが。

「入りを量る」ほうでは、会費の問題です。現在の終身会費制では増えてゆく一方の会員に満足いただける行事を企画することがむつかしくなっています。

終身会費を一度納めればよいという方式は、ある時期から、年会費制に変えないと、いつの日にか行き詰まりが来ます。

ご理解を得ながら、段階的に移行してゆく方策をご提案したいと思っています。さしあたり約50人ほどの会員の声をお聞きしましたところ、ほぼ会費制移行に条件つきも含めて4人中3人の方から賛成のご意見を得ています。

会の存続そのものに異論を唱える方もいますが、存続の意義は大方の会員にはご理解いただいているものと思っています。

私がここで述べた改革案のうち会報のホームページは今年から実行しますが、ほかはまだ検討の段階です。多くの方々からのご意見を反映させながら進めたいと思っています。

何事も段階的にと思っていますが、ことは急いでいます。

積極的にご意見を下さいますようお願いいたします。

特別寄稿

「新技術の谷間」

東邦ガスエンジニアリング(株)

取締役相談役

井上 績

(第16回, 昭和32年卒)



エジソンは、電球・蓄音器・映画など数々の発明で有名であるが、新技術に対する思い入れだけで実用化されなかったものもある。

エジソンは、コンクリートで風呂から水道管に至るまで一気に家屋を作る特許をとった。安価に大普及させようとモデルハウスを作ったが、それが汚れた空き箱のような不細工なできで、人々に見向きもされなかった。また、エジソンは、繰り返し使える蓄電池を思い立ち、1万個も試作したが「これは失敗ではない。駄目な実例を1万個も見つけた。」と失敗を認めようとしなかった。

現在の新技術で注目されているものに、燃料電池がある。この技術は、1839年にイギリスのW・グローブ卿により基本原理の特許がとられている。実用化されたのは、1962年からの米国のジェミニ計画で、宇宙船の電源として採用されたのが最初である。現在では、自動車用として著しい進歩があり、2020年には従来技術のエンジンにとって変わると言われている。燃料電池で実用化されているのは、商・工業用で50kWから200kW級まで、全国で66台、11千kWが稼動中である。これらの燃料電池は、電力と廃熱利用による給湯等で総合熱効率は80%以上となる。これと同じ総合熱効率を達成できる従来技術のエンジンやタービンを使用するコジェネレーションが、同じ用途で数kWから1万kW級まで全国で6400台、6000千kWが稼動中である。この燃料電池とエンジンのせめぎ合いは、1kW級の家庭用電力と給湯分野へと波及しつつある。

新技術と従来技術のいずれが勝利するかはコスト、寿命、環境対応等の優劣となるが、これとは全く違う次元での新技術に対する抵抗もある。

新技術でコストダウンを図ろうとするとき、その新技術により影響を受ける社会への対応について考えねばならない。すべてにメリットが生ずれば問題はないが、影響を受ける社会の一部にでもデメリットがあれば、新技術の採用は困難となる。この場合は、デメリットを受ける社会のシステムまで検討しなければならない。新技術は、社会システムへの適応性まで考慮する必要がある。

パナソニック研究所の調査によると、新技術が製品化され普及するまでに平均19年かかるとされている。また、社会が従来技術をすぐに捨てるとは考えられず、新技術が受け入れられるのは、経済的・社会的な抵抗を乗り越えた後のこととなる。

我々技術者は、新技術に対する期待と開発には多面的な検討を加え、更に長期の対応を考慮する必要がある。

平成 14 年東山会新年同窓会の報告

平成 14, 15 年度事業理事

糟 谷 雅 幸

(第 42 回, 昭和 58 年卒)



平成 14 年度東山会新年同窓会が, 1 月 4 日の午後 1 時から名鉄ニューグランドホテルで開催されました。同会は, 平成 3 年に発足し以降 2 年に 1 度開催されて, 今回で 7 回目となります。平成 11・12 年度東山会総会で始まり, 鈴木隆充会長の挨拶, 庶務・会計及び監査報告がされ, 内容が承認されました。鈴木会長からは, これまでの「東山会運営方針の見直し」に関する会員アンケート結果の紹介と引き続き会員の方々にご意見を募り理事会で議論を重ねる旨の報告をされました。また, 島田俊夫先生(名大・工学研究科電子情報学専攻教授)の心臓移植支援募金のお礼とその後の経過報告もありました。総会は約 15 分で終了し, 引き続き懇親会に入りました。

今回, 私は懇親会の司会をさせていただきました。会長挨拶のあと, 名誉教授の泉亮太郎先生・服部秀三先生・太田博先生・近藤一義先生・村上澄男先生の紹介と, 名誉教授を代表して近藤先生から「科学技術の真の進歩」についての講演をしていただきました。

その他, 大日方五郎教授のスピーチや山下博史教授による名大・機械工学教室の変遷と現状報告があり, 豊田紡織会長の太田和宏様による乾杯の御発声で, 宴は最高潮に達しました。参加 202 名の方々が, それぞれの立場で恩師と級友と, 先輩と後輩で分け隔てなく思いを語り合う姿を拝見していると, 東山会のたくましさを感じるとともに, 原点にもどろう, “東山にかえろう” と強く思いました。

名古屋大学は, 大学全体の活動を卒業生等に向けて情報発信し, 大学と社会の交流の核となる新しいタイプの「名古屋大学全学同窓会」を設立し本年 10 月に設立総会を行うことや, 工学部・工学研究科同窓会が, 工学部 60 周年記念祝賀行事を行うなど, 社会に開かれた大学として発展していこうとしています。

産・学・官が真に理解しあう推進母体として東山会が, 東山新年同窓会が, ますます有意義なものになるよう祈念して, 平成 14 年度東山会新年同窓会の報告とさせていただきます。



会員からの便り



食み出して管理技術 40 年

元 松下通信 品質技術部長
藤川 忠重

(第 11 回 昭和 27 年卒)

工専、大学と 6 年間も機械工学を学んだが、会社で機械屋として仕事をしたのは 1 年 9 ヶ月であった。外国技術導入のガラス屋となったが、それも 5 年勤めて止めさせて貰った。以来、QC、OR、信頼性と、従来の大学には無かった専門分野を辿って今日に至っている。そんな食み出し屋に御鉢が回って来たのでそのことを書くことにする。

そもそも最初に依頼を受けたのは、名簿の初めの方にある A 君であった。自分のことは棚に上げて藤川が最適者だと推薦したらしい。根拠は次の話にある。定年退職後も技術士として企業指導に活躍する A 君は、数年前のこと、文献調査に国会図書館に言った。信頼性学会誌で連載記事の「老兵の手記」と題する拙文をたまたま発見し、驚いて電話を掛けて来た。年 1 回のクラス会では仲の悪いゴルフ仇であったが、信頼性が共通の話題となることはなかった。次のクラス会ではこのことを大いに吹聴したのである。全ての刊行物がそこに収納されていることを知らない人は多く、「国会図書館に藤川の書いたものがある」と聞いただけで驚く。図に乗って関連の話をぶたせて貰い、男を揚げたのであった。信頼性の仕事が NHK テレビの取材を受けたこと、定年退官直前発表した、「松下通信の信頼性活動 20 年の歩み」は反響を呼んだこと、学会では「信頼性の歴史」編纂の委員長を務めたことなど。

信頼性の前に OR(オペレーションズ・リサーチ)をやったが、そのデビューは劇的であった。松下技報に発表した処女論文が工業新聞の注目を受けて顔写真入りで紹介され、大掛かりな連載記事を書かされた。ある出版社からは OR 入門書の著作依頼を受けた。その本はまもなく絶版となったが、昭和 42 年に書いた通信教育講座は未だ続いている。他人が書いた分野も担当し、指導委員として質問に答えている。その月刊機関誌に年 1 回随想を書いて 18 年になる。これもそれまでの分を纏めて A 君に送った。

QC については、関連技術総括責任者として標記肩書きの役目を 10 年勤めた。これらの技術は纏めて管理技術と呼ぶ。奇しくも定年 2 年前に慶応大・理工学部から管理工学科の非常勤講師の委嘱を受け、足掛け 9 年間「品質管理」の講座を担当した。それも辞めて既に 10 年、仕事らしいものはやっていないが、延長線上の技術「多変量解析法」を勉強中である。死ぬまで管理技術の縁は切れそうにない。



今の還暦は、昔の 42 歳の厄年

(株)実践経営研究所
青山 豊三

(第 21 回、昭和 37 年卒)

NHK のドラマ「利家とまつ」にも出てくる信長が好んで舞った幸若「敦盛」の一節「人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり。・・・」のように昔の平均寿命は 50 才、それが最近の厚労省の発表では、01 年の平均寿命は女 85 才、男 78 才。

多くの企業は、60 歳を区切りの歳としています。しかし友達を見ても、60 才はまだまだ、体力的にも気持ちでも現役でばりばり出来る方々ばかり。

皆さんの元気さ見るにつけ、今の年齢に、余裕を見て 0.7 を掛けた年齢が、昔の年齢になるのではと考えると還暦は、昔の 42 歳の厄年、70 歳が 50 歳となり、60 才から充実した第二の人生と言われるのを、自分なりに理解し納得しています。

皆さん、第二の人生を、今までを生かしてお仕事、新しいお仕事、ボランティア、趣味、稽古事等々と楽しんで過ごされておられますが、中には、長年培ってこられた世界に通用する技術、ノウハウを生かすことなく眠らせておられ、勿体ないと言うより国家の損失ではないかと。

自動車、家電、繊維等々、海外移転が、この勢いで進めば、孫達が中国に出稼ぎに行くようになるのではと危惧しています。

そこで例えば、海外でなく日本の中小企業の支援に持てる技術力を活用して貰えるような制度(勿論公的にも、中小企業に専門家を派遣し支援する制度等はありませんが)とか、紹介する方法が気楽にないものかと常々思っています。

そうすれば、中小企業の海外移転にも少しは歯止めが掛かるのではと。

こんな支援を気の合った仲間と楽しく出来ないものかと、「おもい」だけです。

小生も 3 年前サラリーマン卒業。生まれつきの貧乏性ゆえ、まだまだ 42 歳の後後厄の歳だと自分に言い聞かせて、女房と毎日三食一緒に食事する楽しみ? はもう少し後に残し、中小企業の会社の ISO の環境、品質の認証取得の支援、体質改善のお手伝い等楽しくやっております。

最近の書店の店頭にうず高く積み重ねられている石原慎太郎著の「老いてこそ人生」とか日野原重明著「豊かに老いを生きる」「生きかた上手」の本に目が行き、老人力の益々研ぎのかかる毎日ですが、何事もまずは思うことから始まるとの「おもい」から「おもい」にも研ぎをかけ、気の合った仲間と楽しく支援出来る日がくることを願っています。



東京に転勤して

日立金属(株)
山 川 讓 二
(第31回, 昭和47年卒)

24年間の田舎の工場勤務から、東京に転勤して早くも4年になります。生活するのならのんびりと田舎が良いと思いついていたのですが、今では東京の生活に大変満足しています。

東京の良いところは、意外と思われるかもしれませんが、第一に生活費がかからない事です。東京は車がなくても問題ありません。車を手放すと車にかかる経費がいかに大きかったかが分かります。また、住居はいわゆる小さな「ウサギ小屋」です。この「ウサギ小屋」は小さいけれど効率良く出来ていて、狭さを感じさせませんし、何より冷暖房費が半減します。「ウサギ小屋」は地球温暖化を防止するモデル住居の1つだと思います。食料も決して高くはありません。地方から大量の食料が運び込まれる事が高くない理由ではないかと思えます。

第二に、安価に娯楽が楽しめる事です。一流ジャズマンの生演奏が、飲み食いして、4時間楽しんで一万円です。NHK交響楽団の定期演奏会も座席を選ばなかったら三千円で聴けます。ほとんどのプレイヤーが東京周辺に住んでいるため、地方の演奏会に比べ、運賃や宿泊費が不要になるためだと思います。おいしいくて格安な食べ物屋も探せば必ず見つかります。おいしい寿司を毎月家族で楽しむ事は、回転寿司屋以外では、まず地方では無理です。

第三に、地方とのアクセスが良い事です。東京から多くの地方都市へ飛行機が出ています。このため、東京から日本中のほとんどの場所へ、飛行機と車で4時間あれば行けます。4時間以上を要するところは、南紀地方など飛行場が近くにないところに限られます。最近、遷都の報道が聞かれますが、東京と地方のアクセスがこれだけ便利になっているので、実現の可能性は低いと思えます。ただ、遅延が日常化していてパンク寸前である羽田空港の滑走路の増設は急務です。

最後に、何事も他人の意見でなく、自分自身で現地現物を確認して判断する必要があることを東京に住んでみて痛感しています。



新しい風とともに

三菱重工業(株)
風力発電事業グループ
柴 田 昌 明
(昭和57年卒)

大学を卒業して20年、修士の論文作成中に『長崎研究所』の配属通知をもらって愕然とした日から約18年経つが、今も長崎でエキサイティングな日々を過ごしている。

入社当時は、振動研究室で蒸気タービンの翼振動の研究を担当した。もし万が一共振したら、鉄の塊である翼があつという間に壊れてしまう。事故対策で眠れない日々を過ごしたことも何度かあった。最近では、高信頼性翼の開発により、事故は全く無くなり、少々暇になってきた。

三菱重工では、私が入社当時から風車を作っていたが、最近では、世界の環境ブームに乗って大きく事業拡大してきている。入社当時は蒸気タービンの仕事の傍ら、翼の共振やタワーの応答計算をやったこともあったが、ここ数年は、研究開発の取り纏めとして振動だけでなく、材料、強度、性能、騒音などの技術を見てきた。今年10月1日付で社内組織が改変され、長崎造船所所長室直轄の部門として風力発電事業グループが発足し、私は開発チームをリードしていく立場となった。

研究から設計・開発に職務が変わり、急激な事業拡大の中で過去のトラブルの処理や新機種の開発が錯綜し、ここ数ヶ月は気の休まる時の無い日々を過ごしている。

不況が続く中で、2010年には2兆円産業と言われる風力発電事業は、当社でも数少ない右肩上がりの事業として、社内でも注目を集めている。しかしながら、国内シェアも低迷しており、事業が大きく成長するか否かは、ここ数年の頑張り次第というところである。再生エネルギーが世界のエネルギーをすべて賄う時、日本中、世界中で1台でも多く三菱重工の風車が回っている日を夢見て、再びエキサイティングな日々をおくっている。

水力発電に従事しています



中部電力(株)
伊 藤 茂 則
(第51回, 平成4年卒)

平成4年に学部を卒業して、博士課程前期を経て、平成6年に中部電力に入社しました。その後、平成7年から仕事の傍らで社会人Drとして、福田先生にご指導を仰ぎ平成10年に博士号を取得しました。そのため本当に大学を卒業してからは僅か4年ですが、大学の近くを通る度に、目まぐるしく変わる母校の姿を感慨深く見守っております。

在学中は、自律移動ロボットに関する研究を実施しておりましたが、中部電力では畑の全く異なる水力発電所の保守や設計の仕事に従事しております。大学生の頃は、水力といえば山小屋でカタカタと廻る水車程度の認識でしか無かった私にとって、実際の水力発電所で使用されている水車が山小屋の水車と大きく異なることや、実際の水車発電機の保護・制御回路はロボットを制御する以

上に複雑であったことなど、戸惑いの連続でした。しかし、水車の設計では、在学中に学んだナビアストークス方程式による流体解析や、回転機の振動解析などの話が頻繁に登場し、「あの時教わったことが今、役にたとうとは」などと懐かしく思っております。

従来、電気事業では地域独占が保証されてきましたが、平成12年から20kVかつ2MW以上のお客さまについて小売り自由化され、現在、更に経済産業省の審議会にて小売自由化範囲の拡大を検討しています。そのため、弊社をはじめ、既存の電力会社は設備投資や人件費などの削減により、電気料金の値下げなどで競争力を強化するよう努力しております。この中で、新規発電所建設は殆ど繰延られ、主要業務が機器の設計から保守へ移行するなど、仕事の内容が大きく変わってきました。この先、私の会社生活は、大きな山や谷の繰り返しとなると思いますが、いずれ皆様にこの話の続きをさせて頂く際に明るい話ができればと思います。



新たな仲間と共に

大同特殊鋼(株)
徳川豊治
(第61回、平成14年卒)

もう大学を卒業してから早くも半年が経ちました。今思い出せば大学生活で得たものは、今の自分にとって非常に大きな財産になったと思います。その中でも1番の財産は、大学時代に知り合った、たくさんの仲間たちです。特に部活の仲間と過ごした日々は特別な時間だったと思います。私はヨット部に所属していました。ヨットと言うと海の上で帆を揚げてのんびりとクルージングといったイメージを持つ人が多いと思いますが、実際にはとても厳しいスポーツです。それだけに普段の練習も厳しいものでした。休みの日の朝5時半に起床して常滑に行き、朝から日が沈むまで、雨や雪や嵐の中でも海に舟を出し、風と向かい合っていました。楽しいはずの部活が何でこんなにも辛いのだろうか、真剣に落ち込むこともありましたが、そんな時は先輩やら仲間に励まされながら共に頑張ってきました。そうやって部活を通して自分自身を磨くことができたのも周りの仲間と共に支え合ってきたからこそだと今は思います。ほかに研究室の仲間やアルバイト先の仲間などいろいろな仲間が今の私にとって1番の財産となっています。

そして私はこの春から群馬県の大同特殊鋼渋川工場で社会人として新たな仲間と過激で楽しい日々を過ごしています。社会人になるまでは、会社というところは完全に統率された所だと思っていました。しかし実際には1人1人が自分のすべきことを探りつつ、自由かつアグレッシブに動き回っていました。また、上司が相手でも自分の意見をぶつけて言い合っていたり、その後普通に

笑い話をしているといった工場内での日常を見ると、上司や先輩であってもみんな仲間なんだと思えてきます。そして自分も仕事に関してはまだまだ半人前ですが、もうすっかりその仲間の一員になっています。これからの新しい仲間との社会人生活が本当に楽しみです。

新任・着任の先生のご挨拶

本年度は、機械工学教室に新美智秀教授(機械エネルギー工学講座)、社本英二教授(超精密工学講座)、木村英彦助手(連続体工学講座)、機械工学教室と関連の深い電子機械工学教室に劉軍助手(知能生産工学講座)、マイクロシステム工学教室に松田哲也助手(マイクロ材料システム講座)、張賀東助手(マイクロ計測工学講座)が新しく着任されました。新美智秀教授、社本英二教授、木村英彦助手、松田哲也助手から東山会会員の皆様にご挨拶を賜りましたので、ご披露させていただきます。

なお、機械工学教室の来海助手は名城大学、電子機械工学教室の石田助手は大同工業大学、マイクロシステム工学教室の大島康司助手は愛知江南短期大学、野方誠助手は立命館大学にそれぞれご栄転されました。



着任挨拶

機械工学専攻
機械エネルギー工学講座
新美智秀

平成14年4月付けで機械工学専攻機械エネルギー工学講座の教授に着任いたしました。電子機械工学専攻で18年間ほど希薄気体力学や光計測技術に関する研究、教育に携わり、このたび古巣の機械工学専攻に戻りました。どうぞよろしくお願いたします。

私の希薄気体力学に関する研究は、機械工学科から電子機械工学科に異動した18年前の藤本哲夫先生との出会いからスタートしました。この研究では、気体分子運動論、レーザー光学、量子力学など、とにかく大学で学ばなかったことを学ぶことから始めました。実験中心で研究を進め、レーザー誘起蛍光法、CARS法、縮退4光波混合などの新しいレーザー計測手法の開発とこれらの希薄気体流解析への適用を行ってきました。縮退4光波混合の研究を通して位相共役光学などの非線形光学現象に魅力を感じ、原豊先生(現鳥取大学工学部助教授)と光ファイバによる画像伝送やフォトリフレクティブ効果を利用した光ノベルティフィルタの実現を目指した研究も行いました。

現在はこれまでよりもさらに低密度な「超希薄気体流」へ共鳴多光子イオン化法(REMPI法)と呼ばれる手法を適用し、超希薄気体流中で生起する非平衡現象の解明を

目指しています。このREMPI法は、原子・分子の挙動が重要となるナノテクへ寄与できる可能性があります。また文部科学省のプロジェクト研究として、固体表面にポリマーにより固定した特殊な有機分子の発する燐光が酸素により消光される現象を利用した圧力計測手法の開発も行っています。自動車、オートバイなどの表面圧力計測技術としての確立を目指しています。

最近ではコンピュータ全盛の時代で、実験屋が少なくなっています。これは日本に限った話ではなく、先日参加した国際会議における欧米の研究者も同じ意見でした。高性能なコンピュータが安価に入手できる一方で、実験装置とその維持には多大な予算が必要なことから当然なことかもしれません。しかし、実験の重要性はこれまでの学術研究の歴史が証明しています。理論を裏付ける実験結果や新しい現象の発見に学生たちと喜びを分かち合いながら実験中心の研究を進める所存です。

これまでに東山会の会報と編集理事を合計8年間ほど勤めさせていただきましたが、東山会会員の皆様方には、今後とも多方面でお世話になることと存じます。ご指導、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



独創性と実用性を目指して

機械工学専攻
超精密工学講座
社本英二

平成14年4月1日付けで超精密工学講座の教授に着任致しました。平成元年3月に本学の機械工学専攻博士課程後期課程を修了した後、13年間神戸大学工学部機械工学科で製造工学に関する教育、研究に携わり、このたび懐かしい母校に戻って参りました。

本学における学生時代には、前任者である山口勝美先生にご指導頂き、「脆性材料の打抜き加工」という通常では不可能な加工を可能にする研究を行いました。ここで教えて頂いたことは、研究内容以上に発想法であったと思います。近年、多方面で独創性の大切さが叫ばれていますが、独創的な発想には才能以前に物の見方が重要であると感じます。私が学んだ発想法とは、全ての技術は不完全だと考えることです。例えば100年後に現在と全く同じ形で使われている技術がどれほどあるでしょうか？実用化された技術は完全なものに見えますが、これらもいずれは改良され、より優れた技術で置き換えられていきます。目の前の技術を完全なものとして見てしまうと、その枝葉の応用技術しか見えてきません。技術を常に不完全なものとして見ることも、もっと良い方法が必ずあると考えることが根本的に新しい技術を生み出す出発点になります。

一方、神戸大学時代には、実用性を強く意識するようになりました。神戸大学は比較的産学共同研究が盛んな

所で、実用性を重視する気風があります。幾つかの企業と共同研究を行う中で、自分の研究を実用化して世の中に役立てたいと夢見るようになりました。

独創性と実用性を重視することは、技術立国日本が進む方向でもあります。微力ながら、今後もこれらを兼ね備えた技術の研究開発を目指すとともに、これらの能力を養う教育に努めたいと思います。東山会の皆様には、これまで以上にお世話になることと思っておりますが、よろしくお願い申し上げます。

新任挨拶



機械工学専攻
連続体工学講座
木村英彦

平成14年4月1日付けで機械工学専攻連続体工学講座(田中啓介教授)の助手に着任いたしました。平成8年3月に田中啓介教授のもとで本講座を修了後、株式会社日立製作所に3年ほど勤務し、平成11年4月より本講座の博士課程後期課程に再入学いたしました。今春、後期課程を修了と同時に助手に着任いたしました。

学部4年生のときに本講座に配属されて以来、金属材料における疲労に関する破壊力学的研究に取り組んで参りました。金属間化合物や超細粒材料など将来実用化が期待される新材料において、疲労き裂の発生および伝ば挙動に及ぼす微視組織の影響をナノ・スケールで解析してきました。

大学では一環して材料強度学に専念してきましたが、株式会社日立製作所在籍中には医療機器の開発設計を行って参りました。兼ねてより材料分野および医療分野の両方に興味を抱いていたためです。血液自動分析システムの開発を通して、材料分野のみならず制御工学、熱力学や流体工学などにおける実用的技術を学ぶことができました。また、最新の3D CAD、解析ソフトおよびそれらを生産現場にまで連携付けるCAMシステムの構築と運用に携わることができ、もの造りのプロセスを知ることができました。

将来は、企業のシステムおよびもの造りのプロセスを経験してきた研究者として、企業と密に連携しながら従来とは異なる視点で研究を推し進めていきたいと考えております。また、教育者としては、研究者としてのみでなく会社員としての経験を学生に伝え、就職情報のみならず今後の日本の技術開発を支えていくエンジニアとなるために今何が必要かを伝えていきたいと考えております。

東山会の皆様、本学の先生方にはこれからもお世話になることが多いと思っております。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

新任挨拶



マイクロシステム工学専攻
マイクロ材料システム講座
松田 哲也

平成14年4月1日付でマイクロシステム工学専攻マイクロ材料システム講座(大野信忠教授)の助手に着任いたしました。学部時代より6年にわたって大野先生のご指導を仰ぎ、昨年度マイクロシステム工学専攻博士課程後期課程を修了いたしました。引き続き大野研究室にて助手をさせていただくこととなりました。

私はこれまで、均質化理論を用いた複合材料の時間依存変形解析に取り組んでまいりました。均質化理論とは、漸近展開法、あるいは数学的均質化法などと呼ばれる理論で、微視的内部構造において周期性をもつ材料の特性解析に非常に優れているため、種々の複合材料やハニカム・フォームなどのセル構造体の評価・設計に有力な手段の一つとなっています。我々は、この理論を新たに時間依存変形(クリープや粘塑性変形など)に対して展開するとともに、一方向長繊維強化複合材料や長繊維強化積層板の弾-粘塑性変形解析に適用してまいりました。またそれと並行して、解析結果の妥当性を示すための検証実験も行っておりました。このように、学生時代には研究者として必要とされる多くの経験をさせていただくことができ、ご指導いただきました大野先生をはじめ、研究室の皆様、学科の先生方に深謝いたしますとともに、今後はこれらの経験を生かし、研究活動に励んでまいりたいと考えております。

さて、今年度より東山会の会計理事という大役を仰せつかりました。まだ助手になりたてで右も左も分からぬ若輩者ですが、諸先輩方が丁寧にご指導して下さるおかげで、どうにかやっている次第です。現在、東山会は変革の時期にさしかかっており、理事の先生方を中心として新たな方向性を模索している段階です。このような時期ですので、私も微力ながら最善を尽くしたいと考えております。なにぶん至らない点が多いとは思いますが、東山会の皆様にはご指導の程、心よりお願い申し上げます。

退官・退職された先生のご挨拶

名古屋大学大学院工学研究科機械工学教室において、長い間研究と教育にご尽力されました長藤友建先生(ヒューマンシステム工学講座)、柳田武弘先生(統計シミュレーション工学講座)、が今年3月名古屋大学を停年退官され、藤田秀臣先生(機械エネルギー工学講座)、バチコフ先生(マイクロ制御工学講座)が退職されました。長藤先生、藤田先生、バチコフ先生から東山会会員へご挨拶を賜りましたのでご披露させていただきます。また各先生方になじみの深い方々から先生の思い出などを語っていただきました。

駆け足名大雑感



長藤 友建

私は長年(株)東芝の研究所に勤務した後、縁あって名古屋大学に4年間お世話になりました。名大に骨を埋められるほどのご活躍とご愛着を持たれておられる先生方と肩を並べて退官の言葉などおこがましい限りですが、一飯の義理を果たすべく、駆け足的で的確でない所はご容赦いただきとして私なりに感じた所を述べさせていただきます。

私が退職する時期の大企業では完全週休2日制が定着し、ワークシェアリングの名のもとにゆとりあるライフサイクルになっていました。名大に転職するに際して、私はその延長線上に、より自由な生活を期待して来た訳ですが、その期待は「教授」は「個人商店主」との言葉でもろくも潰れてしまいました。事実、大学での4年間は何事も自ら率先してこなすには週5日制から週6日制に逆戻りせざるを得ない状況で、時間に追われてせっかく手にした自由を生かせなかった無念さがあります。

何故大学がこんなに忙しいのか? 全ての先生が大なり小なりそう感じながら、ご自分の自由裁量権を最大限活用してなんとか時間のスピードに追従している様子が目に浮かびます。「個人商店主」は一般に地域の商業組合などに所属しますが、親睦会的付合いに近く、日常の活動は全てにおいて独立独歩です。大学では専門研究分野の活動はこれに近いのですが、教育および人事などの事務については合議制のもと即断即決など不可能に近い体制にあります。もともと理論家肌の先生方は自説の主張を得意とし、協調することは負けとの感覚が強く、行きつ戻りつ時間のみが経過し続けます。手抜きに走れる悟りを開いた方と後始末に追われる真面目な方が同居できる自由さこそが大学の信条でしょうが、組織としては無責任体制に近く、それをまとめる教室主任の労力は並大抵ではありません。研究に追われる忙しさであればそれなりに充実感があるでしょうが、雑事に追われる場合は義

務感のみで、一人前の教授になるためのみそぎに近い苦行となります。したがって、大学の忙しさにはピンからキリまであり、価値ある忙しさにひたれる環境づくりこそ重要で、幸い私は研究スタッフが居ない反面、「高度総合工学創造実験」の専任教官として忙しさを自らの糧にできたことを幸せに思っています。

これから大学も独立行政法人化はさけて通れない道であり、そこではグローバルな競争原理が働き、時間は世界共通ですからまず時間の価値を高めることが先決で、特に機械工学教室の将来を担う若い先生方には上の上を行く気概と上にノーマンと言えぬ勇気をもって自らの時間を価値あるものにしようとする環境づくりに励んでいただきたい。「教授」が自らを「個人商店主」と卑下するような環境から「世界のCOE創出主」と胸をはれる時間の価値観の飛躍を期待して結びとさせていただきます。



長藤友建先生の思い出

長谷川 豊

(第41回、昭和57年卒)

長藤先生は東芝ならびに東芝重電技術研究所に長年ご勤務された後、1998年より5年間を名古屋大学で過ごされました。大学では工学研究科の総合工学科目「高度総合工学創造実験」をご担当されるとともに、菊山功嗣教授とご一緒に機械工学専攻移動現象工学講座の研究指導に当たられました。

長藤先生と初めてお会いしたのは、教官十何年目である私がまだ大学院生の時ですので随分と昔です！ターボ機械協会の講演会にてご質問される姿を拝見し、流体工学・ターボ機械に関する深い造詣と真摯な姿勢に対する尊敬の念と、妥協を許さない鋭い質問内容に恐れを抱きました。その後、先生は機械学会流体工学部門長など学会での重席を歴任され、この印象は益々膨らみました。

名古屋大学にご赴任後、同じ研究室の教官として研究指導のお手伝いをさせて頂く過程で、多くのことを先生からご教授頂くとともに、お人柄にも触れることができ、私の中での先生像には暖かな丸みと厚みが加わりました。ともすれば狭い視野の中で闇雲に進みがちな大学での研究に対して、企業からの視点で、研究遂行における効率化と目的意識の重要性を学生ならびに研究室スタッフに説かれました。

先生は、熱心な研究指導以外にも学生・院生との触れ合いを大切に、年平均6回の研究室飲み会にもほぼ皆勤、夜が更けるまで学生達と熱く語られました。実は先生、無類の酒好きだったのでは、と学生共々密かに拝察しております。先生の意志の強さを痛感したのは、赴任4年目のことでした。ヘビースモーカーの先生は、学会・研究会等でも休憩時間には必ず喫煙所に現れ、美味そうに煙草を燻らせていました。その先生が一念発起で禁煙開始、見事に止められました。見習わなくてはと思う端

から煙草に手が行く、意志薄弱の私には、想像を絶する意志の強さです。

名古屋大学をご退官後、東海職業能力開発大学校へ校長として赴任された長藤先生には、ご多忙にも関わらず共同研究の形でご指導を引き続き賜っており、深く感謝致しております。研究室スタッフ・学生・卒業生一同、今後とも公私両面での末永いお付き合いを願っております。最後になりましたが、長藤先生の益々のご活躍とご健康を心よりお祈り申し上げます。



退職のご挨拶

藤田 秀 臣

(第21回、昭和37年卒)

私は昨年の9月末に、定年まで1年半を残して名古屋大学を退職しました。年度途中のため、多くの皆様にご迷惑をお掛けしたことをお詫び申し上げます。

名古屋大学には昭和33年4月に入学し、大学院博士課程を終えるまで、学生として9年間を過ごしました。引続いて機械工学第二学科自動車工学講座の助手に採用され、その後機械学科の熱力学及び熱機関講座の講師になりましたが、昭和47年から7年間は創設間もない三重大学工学部に勤務しました。昭和54年4月に再び母校にもどり、昨年9月まで助教授、教授として伝熱工学やエネルギー変換など熱工学に関する教育と研究に従事しました。名古屋大学には学生と職員の期間を合わせて36年半お世話になりましたが、この間、多くの先生、先輩から多大のご指導とご鞭撻をたまわり、また、同僚の教職員はじめ学生諸君からも幾多のご支援をいただきました。改めて感謝申し上げます。

東山会との関わりも少なからず思い出されます。昭和45年に工学部全体の同窓会名簿が初めて刊行されました。高浜平七郎教授が編集委員長を務められたため、東山会の原稿のとりまとめに加えて、全体の索引づくりを同じ講座の私が仰せつかりました。もちろんコンピュータはなく、やっと複写機が普及し始めた頃のことですから、手書きの名簿原稿を複写し、それを各人ごとに切断して自宅の畳の上に並べ、カルタ取りの要領でソーティングをしたものです。高浜先生は機械学科の第2回卒業生であり、また研究室には昭和16年以来の職員である河村鈎さんがおられましたから、昔のキャンパスの様子や、戦中および終戦直後の教官や学生のご苦労の様など、多くの興味深いエピソードを聞かせていただきました。

7月の末に久しぶりに東山キャンパスを訪ねましたが、1号館南館の撤去や2号館の大改修など、この10ヶ月間の変化の激しさに大変驚きました。しかし、我が国の大学を取り巻く環境は、それ以上に、これまでに例をみない激しさ、厳しさで変化するように思われます。この激動期をのりこえて、母校がますます発展されることを祈念致します。



藤田秀臣先生の思い出

廣 田 真 史

(第42回, 昭和58年卒)

藤田秀臣先生が三重大学から再び母校に戻られた昭和54年は、我々第42回生が名古屋大学に入学した年にも当たります。しかし、私を含めた大半の学生が初めて藤田先生の姿をお見かけしたのは、それから2年半後、ご病気で入院されていた高浜先生に代わって熱力学第2の講義を担当されたときではないかと思います。現在でもお若く見える先生ですが、当時は講義される様子が大変若々しく、アメリカ留学の名残を思わせるスマートな立ち振る舞いと三重弁のミスマッチが私には印象的でした。後年、教授になられてからも国際会議で大学院の学生に間違われたことがあり、相手に名刺を渡したときの狼狽ぶりを愉快そうにお話しされていました。

先生を知る多くの方々は、こうした若々しさに加えて暖かく誠実なお人柄を思い起こされることと思います。研究室に配属されると、先生の「新しい物好き」の一面も垣間見る機会を得ました。パソコンを所有する研究室自体がまだ珍しい頃に、研究室のパソコンには既にフロッピーディスクドライブが接続されており、卒研生も自由に使うことが出来ました。当時勤務されていた河村鈞先生の部屋まで、貴重品だったディスクを1枚ずつ貰いに行ったことを懐かしく思い出します。外車より高価だったFFTアナライザ、時間を止めたハイスピードビデオから流体計測の概念を変えたPIVシステムに至るまで、新しい測定装置の導入には大変積極的でした。その一方で、こうした「便利な」装置により得られたデータの信頼性評価には鋭く厳しい態度で臨まれ、私自身も含めて研究室内のコロキウムで絶句した学生の姿が今でも目に浮かびます。この様な先生の姿から、実験を研究の中心に据える者として、実に多くの事を学ばさせていただきました。

講座の実験室が入っている熱水力実験棟は、教授室のある2号館とは別棟になっていましたが、先生が実験室に来られるとすぐ分かりました。学生と話す朗らかな話し声と笑い声が実験室中に響くからです。熱流体工学の実験は、測定そのものよりもトラブルシューティングに多くの時間を割いているようなところがあります。その様な苦しい状況の中で、研究室に在籍した多くの学生が、先生のあの暖かな話し声と笑い声に励まされ勇気づけられながら、社会に巣立っていきました。先生の声の実験室に聞こえなくなって既に1年以上経ちますが、新たな就任先でまた学生たちを励ましながら、教育と研究に専念されていることと思います。最後になりましたが、先生の益々のご活躍とご健康を心よりお祈り申し上げて結びとさせていただきます。

Ever Changing for Better



Gancho VACHKOV

When I moved from Kitami Institute of Technology in Hokkaido to Nagoya University, on April 1st, 1998, I found immediately the big difference in the scale. It was really a big and well-recognized University, with an old history and a number of worldwide famous professors and researchers. The Laboratories everywhere were full of sophisticated and expensive measuring instruments, computers, setups and many other experimental devices. Everything was so dense that sometimes it was difficult to find the students between the machinery in the Laboratories. And everybody was so busy with his own duties, especially the professors, running from the Lecture room to the Meeting room or to the Laboratory for consultation with the students. Quite often this tight, but usually deterministic schedule was interrupted by visitors from other Universities, or Companies, or by guests from abroad. This was at least the real situation and the everyday life in the Laboratory of Prof. Toshio Fukuda, where I stayed. Soon I had the impression, that this University and particularly, the Laboratory resemble a continuously working Industrial Plant, except that the production was mainly intellectual one.

I tried to adapt to this dynamic situation and was very pleased to find that all people around were quite helpful and tolerant to me in any sense. It was a not easy task for me (mainly because of the language problems) to take part in many meetings and discussions on a regular basis, as all other professors. I had to learn some rules for different procedures, as well as the way of discussions and decision-making and was surprised of the excellent organization for most procedures, even if it seemed to me that they have been quite long. I understood that the dissemination of the information from the upper to the lower level is quite important for the smooth work and good performance of each Laboratory.

Another thing, which impressed me much during my stay at Nagoya University, was the high criteria that have been established for graduating and for evaluating the performance of the students during their study period. Here the regularly held research meetings were one of the best “driving force” for students advancement in the study.

. They have been encouraged and even requested to include a kind of novelty and/or originality in their research and to think more critically. And these requirements have been increased “linearly” from the 4-th grade and Master-course students to the Doctor-course students.

Very clear criteria for evaluation of the performance of the whole Laboratory and the teachers in it have been established that include the number of papers, patents, conference proceedings and international and domestic activities, such as invited lectures and projects. All this means that in order to keep at least the average level of this University, you have to be always productive, inventive and active in any way. It is a kind of a dynamic balance that should be kept by many everyday efforts; otherwise you may be one day far from the leaders.

Other people can evaluate in many ways the results of my four-years stay in Nagoya University. However, personally for me, it was a very special period, full with good memories. I got further experience in teaching and doing research in this dynamically changing University. I also got many good friends among the current and previous staff members of Nagoya University. Needless to say, that “Higashiyama-kai” with its regular friendly meetings has played a very important role for establishing such kind of friendship and a possible future cooperation.

ガンチョ・バチコフ先生の思い出



マイクロシステム工学専攻
長谷川 泰久
(第53回, 平成6年卒)

ガンチョ・バチコフ (Gancho L. VACHKOV) 教授は, 平成10年度にマイクロ制御工学講座に着任されてから4年間, プラントの異常診断やファジィ推論, ファジィ制御に関して理論的な研究をなされ, また, 数々の国際会議での実行委員やIEEEの各種論文の査読委員等を務めら, 温厚な外見からは想像できない程, 大変盛んに活動されておりました.

民間との共同研究にも教授の提案するファジィ推論によって目標性能を達成することができ, また, 一緒に参加したカナダでの国際会議では, とてもわれわれから話しかけることを臆する様な著名な先生を紹介していただき, 貴重な意見交換をすることができましたことを大変感謝しており, まだ昨日のこの様によく覚えております.

教授は, ブルガリア出身でありますが, 名古屋に来られる前に既に九州工業大学や北見工業大学等, 日本で研究経験もある為, かなり日本に関して詳しく, また日本語での会話もすることがありました. このような経験に基づく日本の文化・様式への理解や配慮のもとで, 研究室内の留学生や海外からの研究生に対し, 研究面だけでなく, われわれ日本人には気づかない私生活の問題に対しても相談に乗り, 支援をして頂きました. また, 日頃忙しい研究生活を送っている教授は, 学会等への参加時には, 家族と一緒に旅行することで家族への配慮も忘れていないところに, きめ細かな気配りを感じました.

平成14年度からは, 教授は, 香川大学にて研究・指導をされております. 香川に発たれる直前に教授は, 「これで, 北海道, 本州, 四国, 九州のすべてに住むことになる。」とおっしゃっていたことが印象的でした. これまでの豊富な経験や海外からの視点を活かし, 引き続き, 香川大学での更なるご活躍をお祈り申し上げます.

学内近況



大学改革と 自己評価・外部評価

機械情報システム工学専攻
酒井康彦
(第37回, 昭和53年卒)

大学改革の一環としての国立大学の法人化, 言い換えれば「国費で運営される法人格を取得した大学」のスタートが平成16年度に迫っています。国立大学にとって, この改革は明治政府の「学制公布」(1872年)による帝国大学設置, 第2次世界大戦後の新制大学の発足に続く第3の大転換と捉えられています。中曽根内閣から始まった行政改革の波が国立大学に怒濤のように押し寄せ, 昨年6月に, 遠山文部科学大臣から打ち出された「国立大学の構造改革の方針」, 通称「遠山プラン」により, 国立大学の再編・統合の大胆な促進, 民間的発想による経営手法の導入, そして第3者評価に基づく競争原理の導入が文教政策の柱となりました。事ここに至っては, 好むと好まざるに拘わらず大学の自己改革を推進せざるを得ない状況になって来ています。名古屋大学工学部・工学研究科では, このような国家的大学改革の流れにいち早く対応し, 平成11年度より自己評価実施委員会を設置し, 平成12年度で実施方法を検討した上で, 平成13年度中に各専攻および工学研究科全体の外部評価を実施致しました。機械系専攻(機械工学専攻, 機械情報システム工学専攻, マイクロシステム工学専攻機械系併担講座)でも, 平成12年度, 13年度の自己評価実施委員会委員および専攻主任が中心となって研究業績, 学協会および社会活動, 国際性および研究経費など詳しいデータを収集し, これらを纏めて「自己評価資料」を作成いたしました。このようにして作成された自己評価資料について外部から評価をいただくために, 企業関係者から豊田紡織株式会社社長, 株式会社デンソー相談役の太田和宏氏, そして大学関係者から芝浦工業大学教授, 日本学会議会員, 東京大学名誉教授の平田賢氏の2名の先生に外部評価委員をお願いしました。外部評価実施会は平成13年9月18日(火)に開催され, 機械系専攻の組織・運営, 教育・研究活動などの全体説明と質疑, 各講座概要の説明と研究室の見学, および総括討論と講評をしていただきました。外部評価委員による評価項目は工学研究科全体で統一され, 以下に示す6項目でした。

1. 組織, 運営, 人事
 2. 教育活動
 3. 研究活動
- 研究目的・目標

研究内容・水準

研究の達成状況(研究業績, 特許, 受賞, 国際会議発表, 共同研究, 研究費・外部資金導入, 学外委員会等), 研究の質の向上, 改善及び研究活動活性化のためのシステム

4. 教育研究設備
5. 社会活動
6. 総合評価

評価は各項目について, 5段階(5:大変よい, 4:良い, 3:普通, 2:やや不十分, 1:不十分)で行われました。結果の詳細は紙面の関係でここに紹介できませんが, 平均点のみ示しますと, 太田委員3.9点, 平田委員4.2点でした。全体として, 両委員の評価は高いものでしたが, 項目5の社会活動については, 少々厳しい評価をしていただきました。以上の内容は, 平成13年10月発行の「名古屋大学大学院工学研究科 機械系専攻 自己評価・外部評価報告書」に纏められております。

平成14年度に入ってから, 大学情勢が益々変化しており, 大学評価・学位授与機構による教育評価(10月31日~11月1日に開催予定), 平成15年度に公募される21世紀COE(Center Of Excellence)プログラムや知的財産本部の設置への対応, さらに平成16年度の独立法人化に時を合わせての大専攻・大講座制への移行など, 21世紀での大学組織の生き残りを掛けた真剣な討議がなされております。2年後には機械系専攻も大きく変化していることでしょう。東山会会員の皆様にはこの大転換期の母校の改革を暖かく受けとめ, 今後の機械系専攻のさらなる発展のためにぜひともご尽力賜りますようお願い申し上げます。

関西支部便り



関西支部便り

関西支部 支部長
白木 博明
(第7回, 昭和23年卒)

第39回支部総会は、平成13年11月10日、大阪中央電気倶楽部で、本部より鈴木隆充会長の来阪を頂き、26名が集い盛大に行われました。招待講演は、田中英一氏(大学院教授・機械情報システム工学専攻, S47年卒)が、最近の東山キャンパスの現況をパソコン、プロジェクターを駆使して、豊富な資料で報告された。新2号館の完成、環境学研究科の新設、外部評価委員会による大学成果の評価、トヨタ寄付講座の事、環境、生命科学に対応した新研究組織で大学の組織も大変革期にある事などである。特別講演は新田恒治氏(元松下電器産業役員、研究・環境本部長、名古屋大学理学部 S35年卒)が「21世紀の技術革新-情報革命の視点から」と題し、15世紀の印刷、18世紀の蒸気機関、19世紀モールス、ベル、そして今日、一日の電子メール数は10億通と時系列なお話の後、1025年の世界人口は今日より25億増えて85億、85%が発展途上国、一方、地球の誕生年齢は46億、生命体のそれは35億年、動植物の種類は160万で、そのうち80万は昆虫で、昆虫は既に10億年以上生き延びている。したがって21世紀は「自然から学ぶ」視点で技術革新と産業の育成が大切との結論であった。

総会報告では、支部長は謝辞挨拶で野依先生ノーベル賞受賞による関係者の喜び、と関東支部の設立を強く訴えた。続いて、鈴木本部長から東山会を代表して、ご挨拶を頂く。S25,26年卒対象の東山へ帰る日の事、本部財政の厳しい現実、電子情報学専攻の島田教授への渡米心臓移植日についての東山会会員の友愛醸金への謝辞が述べられた。関西支部の活動に高い評価を頂き、ご支援

に謝意を表したい。支部の会務報告に続き会計、会計監査、庶務、の各幹事より報告があり、可決承認された。

その外会員訪問に登場頂いた江副茂氏(S30年卒)、我が生涯学習の松住清文氏(S23年卒)、故永田直明氏、故光崎雅男をしのぶ記事を頂いた雨宮陽三氏(S18年卒)、小澤喬二氏(S28年卒)、東山へ帰る記の山本順一氏(S21年卒)、愛知がんセンターでの胃手術体験記の鷲田俊次氏(S32年卒)、文革から新時代へ激動の中国体験記の川本利治氏(S33年卒)、原型開発からライセンス会社として一貫してDVD開発の醍醐味を満喫された後藤芳和氏(S48年卒)、22年ぶりの母校訪問記を寄せられた白髪昇三氏(S52年卒)の投稿にも感謝したい。

懇親会は荻原庶務幹事の名司会で老いも若きも垣根を取り外し談笑。光栄の若手No.1は和田滋憲氏(S43年卒)で乾杯の音頭と挨拶ついで、すぐに盛り上がる。途中、青山幹事より囲碁同窓会年間優勝は岩田さんで、野崎幹事よりゴルフ同好会のベストスコアは山田さんと発表される。囲碁とゴルフは支部親睦の要、幹事の献身的苦勞に謝意を表したい。司会の巧みな誘導で全員が何かしゃべり、また論じて気分は学生時代に帰る。

アルコールと共に名大学生歌「若き我ら」の大合唱となる。旧制卒業生は共に歌う大努力がをしてだんだんに慣れてくるし、新制の校歌を味わう。時代は変わった。旧制高校寮歌は地元八高の「伊吹おろし」で始まる。会員の多い?六高は毎年一人でも寮歌歌詞を用意して歌う。東山会に、戦後は後輩がいないが高校スピリットはなくならない。寮歌通の常連、前田さんからいつも寮歌に関するコメントがある。旧制高校をつぶした戦後教育の功罪、我々戦前派の意識の根底にあることは間違いない。再会を約してお開きは多感の青春の思いでもある。

本年の支部総会は平成14年11月16日(土)16:00より大阪中央電気倶楽部で行います。本部鈴木隆充会長が来阪され、新進気鋭の新美智秀大学院教授(36回, S52年卒)に大学の近況を講演していただきます。先生歓迎のためにも卒業同期の付近の会員諸君のご参加を特にお願ひします。特別講演は川本利治氏(元新日鉄, S33年卒)に“中国人と付き合うには”を語って頂きます。飛び入りで結構です。在阪の友を誘い是非参加ください。お待ちしています。



第39回支部総会(大阪中央電気倶楽部にて)

村上光清先生を偲んで



ドイツの偉大な流体力学の研究者プラントルの独創性をたたえ、「工学の研究はかくあるべし」と絶えず私たちに指針と励ましを与えていただいた村上光清先生が去る5月21日亡くなられました。先生の研究方針は、研究目的を決めると、簡単な機材を工夫、改良した実験装置を用いて、流動現象を測定し、そこから普遍性を引き出すスタイルで、現在のように多額の研究費をかけなければ良い成果が得られないものとは大きく異なるものでした。私たち助手や院生への日頃の教育、研究指導では、実験データはその日のうちに処理し考察すること、口頭発表したものはすぐに論文投稿することなど研究者としての基本に一貫性がありました。またドイツ語の文献をテキストに講座輪講は土曜日午後15時に定例化され、窓外の喧騒などを耳にしなが、一生懸命活字を追いかけるのが週末の行事でありました。

一方、当時の水力実験室は古屋、村上両先生のもとに研究のみならず、スポーツも盛んで、活気に満ちていました。村上先生はとくに野球と卓球に関する理論家であり、スポーツも研究と同様、理論的考察(入門書の詳読など)と練習を並行させることを強調されたものです。

先生は早くから骨相学に興味をもたれ、新聞写真の切り抜きなどから、凶悪犯の骨相、学者文化人の骨相などを分類されておられたと聞いています。入学試験の監督で、受験生の骨相から合格者を予想したことは有名な話です。しかし当時流行中の長髪のため合格予測の精度はそれほどでもなかったようです。在職の晩年のころには記憶術に精通され、その記憶領域は職員録から4桁対数表(高等学校の数学の教科書の付録にある数表)まで及ぶものでした。先生はあるとき数字のべき数の計算を暗算でやられたことがあり、その秘訣をお聞きしたところ、記憶術によって対数表の数字の出し入れが自由であるとの説明に驚かされました。

先生から教えられた多くのなかで、大事なことのひとつに、行動を起こすとき、それを最後までやり抜く気力を堅持することです。現在の多忙な中で、その教えを出来る限り守り抜くことの重要性を痛感しています。

先生のご冥福をお祈りします。

(文責 菊山功嗣)

村上光清先生の御略歴

大正9年8月20日	生れ
昭和18年9月	名古屋帝国大学工学部機械学科卒業
昭和25年11月	名古屋大学助手(工学部)
昭和28年4月	名古屋大学講師(旧制、工学部)
昭和31年7月	名古屋大学助教授(工学部)
昭和31年11月	市立大学助教授(理工学部)
昭和34年4月	市立大学教授(工学部)
昭和38年10月	名古屋大学教授(工学部)
昭和59年4月	名古屋大学名誉教授
平成14年5月21日	死去

訃報

機械工学教室と関連の深い電子機械教室の旧教官、東京大学大学院工学系研究科精密機械工学専攻助教授 湯浅秀男氏が9月18日突然死のため急逝いたしました。享年41才でした。慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

各種報告

東山会平成 13 年度庶務報告

- (1) 平成 13 年 6 月 8 日
東山へ帰る日(名古屋大学工学部新1号館,ユニバーサル倶楽部,卒業生27名,理事13名,大学職員4名,合計44名)
- (2) 平成 13 年 7 月 19 日
理事会(名古屋大学内グリーンサロン東山,20名)
- (3) 平成 13 年 10 月 12 日
理事会(名古屋大学内グリーンサロン東山,12名)
- (4) 平成 13 年 11 月 8 日
東山会関西支部総会・懇親会
- (5) 平成 13 年 11 月 15 日
東山会会報発行
- (6) 平成 14 年 1 月 4 日
東山会総会(名鉄ニューグランドホテル,202名)
- (7) 平成 14 年 1 月 4 日
東山会新年同窓会(名鉄ニューグランドホテル,202名)
- (8) 平成 14 年 1 月 25 日
理事会(名古屋大学内グリーンサロン東山,16名)
- (9) 平成 14 年 3 月 25 日
東山賞授与(3名)
東山会新入会員歓迎会(名古屋大学内グリーンヒルクラブ,約95名)
- (10) その他
学内理事連絡会(名古屋大学工学部機械系会議室)
第1回 平成 13 年 5 月 17 日
第2回 平成 13 年 7 月 17 日
第3回 平成 13 年 10 月 11 日
第4回 平成 13 年 12 月 11 日
第5回 平成 14 年 1 月 21 日
工学部・工学研究科同窓会名簿
第1回編集委員会 平成 13 年 11 月 26 日
(工学部大会議室)
第2回編集委員会 平成 14 年 1 月 18 日
(土木会議室)

平成 13 年度東山会会計報告

(平成 13 年 5 月 1 日 ~ 平成 14 年 4 月 30 日)

< 収入の部 >

1. 前年度繰越金	4,826,053 円
2. 平成 12 年度東山会名簿 @ 4000 円(40 名)	160,000
3. 同窓会名簿広告掲載料	72,000
4. 東山へ帰る日会費@ 5000 円(35 名)	175,000
5. 機械工学教室誌代金@ 1000 円(2 名)	2,000
6. 平成 14 年度新年同窓会会費 @ 8000 円(191 名)	1,528,000
7. 預貯金利息等	1,474
8. 学士会より祝い金	32,700
9. 平成 13 年度入会金及び終身会費 @ 8000 円(112 名)	896,000
収入合計	7,693,227 円

< 支出の部 >

1. 理事会会合費	111,320 円
2. 会報発行関係費	1,297,191
3. 郵便振替費(6~1号)	8,620
4. 事務通信費	19,950
5. 事務用品消耗品代	15,612
6. 事務補助員給与	372,470
7. 東山へ帰る日会場費等	201,500
8. 平成 12 年度工学部同窓会分担金	11,000
9. 島田先生を助ける会案内送付	386,879
10. 平成 13 年度関西支部総会費	90,000
11. 平成 14 年度新年同窓会費	1,388,373
12. 新入会員歓迎会費	302,453
13. 理事選挙葉書郵送料	191,950
14. 現在の資産	3,295,909
支出合計	7,693,227 円

ホームページ開設のお知らせ

近年インターネットの急速な普及により、知りたい事や伝えたい事が即座に分かる大変便利な時代になりました。このようなインターネット時代において、東山会では遅ればせながら、東山会の公式ホームページを開設する運びとなりました。東山会では、このホームページ開設により、同窓会の活動内容をリアルタイムで情報提供するだけでなく、会員同士の親睦とコミュニケーションの場を広げ、更に同窓会に新しい価値を創造し、新しい活動を見出して行こうと考えております。

今後は運営するにあたり、皆様のご意見・ご要望等を反映して充実したものにしたいと考えておりますのでよろしくお願い致します。

ホームページアドレス：<http://www.higashiyamakai.com>

「主な掲載事項」

会長挨拶、沿革・会則、年間行事予定、同窓会役員、会報、写真集、リンク



会報発行形態変更について

平成13年度の東山会会計によれば、会報発行に伴う費用は約130万円、その内訳は印刷費が約60万円であるのに対し残り70万円は会報を5,000名の会員にお届けする郵送費となっております。当然ながらこの郵送費は会員の増加に伴い、年々増加していきませんが、この経費を削減し余剰を例えば在校生と卒業生の交流会等の新規企画の充実、或いは出版事業等に廻せばより有意義な同窓会活動が展開できると考えられます。

この近年の東山会財政状況を踏まえ、これまでに東山会では同窓会改革の一環として会報発行に対し、会員の皆様から様々なご意見を頂戴してまいりましたが、去る10月4日の理事会で、東山会ホームページに会報を掲載する案が提案、審議され、これが承認されました。これを受けて、来年度から会報を電子化し、ホームページ上に掲載することになると思います。ただし、ホームページを見ることができない環境にある会員の皆様（希望者）には簡易印刷したものを郵送する形をとりたいと思います。紙形式での会報を郵送ご希望の方は、同封のはがきに発送希望の有無を記して返送していただければ幸いです。

東山会では今後、従来からの紙媒体としての情報に加えて、東山会ホームページの充実に力を注ぎ、速報性を必要とする情報、同窓会主催の行事案内、会報やそのバックナンバーの提供を行ってまいります。このような従来方式からの変更には少し戸惑いがあるかも知れませんが、今後会員の皆様の建設的なご意見を頂戴し「走りながら考える」ということにしたいと思います。ご協力をよろしくお願い致します。

第4回「東山へ帰る日」開催予告

本会では、卒業50周年を祝賀するとともに、母校の東山キャンパスに集い、卒業生相互・関係学科現職員との懇親を深めることを目的として、下記の通り第4回「東山へ帰る日」を開催致します。平成10年にスタートした同行事は、過去3回の開催において、いずれも多数の卒業生にご出席をいただき、盛会裡に終わることができました。今回の対象は第11回（昭和27年3月）、第12回（昭和28年3月）の卒業生とし、案内状をお送りする予定です。該当する卒業生の皆様におかれましては、お誘い合わせの上、多数ご参加くださいますようお願い申し上げます。この機会にクラス会を計画されます場合には、東山会としてもお手伝いをさせていただく所存です。また、上記以外の卒業生のご参加も歓迎いたしますので、参加ご希望の方は庶務理事あるいは事業理事宛ご連絡下さい。

記

第4回「東山へ帰る日」

日時：平成15年6月6日（金）（名大祭期間中の金曜日）

（注）名大祭の日程が未定のため変更の可能性もあります。

場所：名古屋大学東山キャンパス

会費：5,000円

対象：第11回（昭和27年3月）、第12回（昭和28年3月）の卒業生には
4月初旬に案内状をお送り致します。

（他年度の卒業生で、参加希望の方はご連絡下さい。）